『“国宝”を創った男　六角紫水展」構成と見所

Ⅰ　趣旨

明治維新後の廃仏毀釈や欧化政策により日本の伝統的文化財は存亡の危機に瀕しました。これらの文化財を調査･保存し,国宝指定するため,明治 30 年制定の古社寺保存法のもと,中尊寺金色堂（岩手県）を皮切りに，厳島神社（広島県）や三徳山三仏寺（鳥取県）など，岡倉天心らとともに全国を奔走した一群の人々の中に，若き日の漆芸家・六角紫水がいました。

六角紫水（慶応 3・1867 年～昭和 25・1950 年）は瀬戸内海に浮かぶ能美島の大原村（現在の広島県江田島市大柿町）に生まれ、東京美術学校美術工芸科漆工部を第 1 期生として卒業して以来，東京美術学校教授，帝国芸術院会員などを歴任し，わが国の近代漆芸史に大きな足跡を残しました。

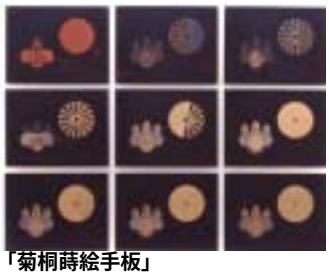
その業績は，わが国漆芸の，伝統技法の研究と継承，芸術性の向上や近代化，応用範囲の拡大と普及，文化財保護や学術研究など多岐にわたります。なかでも，日本の伝統文化が存亡の危機にあった激動の近代において，古社寺保存法による国宝指定やそれらの研究模写を積極的に推進したことは，わが国特有の伝統文化である漆芸を保存し，継承する上で，紫水の幅広い活動の中でも特筆すべき功績といえます。

この展覧会は，六角紫水の代表作を初めとして，関連する資料約 200 点を展示することにより，その業績を総合的に紹介するとともに，特に，日本におけるその草創期を切り開き，生涯に渡って情熱を傾けた文化財の保存・継承活動～調査・研究・修復・模写，そして創造に至る過程～に焦点を当て，それらが国宝や世界文化遺産として結実した現在，紫水の果たした歴史的意義を顕彰しようとするものです。

Ⅱ　展覧会の構成と見所

第１章　漆芸家・六角紫水の誕生～生い立ちから東京美術学校卒業まで～

「臨画（維摩）」（六角紫水，明治 20 年代，茨城県天心記念五浦美術館）



「菊桐蒔絵手板」（東京藝術大学大学美術館，明治 25 年）

謹厳実直な農家に生まれ育った紫水が，向学心に燃え，農業を手伝う傍ら広島師範学校へ進学し，さらに塾や小学校の教師として働きながら，東京美術学校の第一期生として入学し，漆芸家として立ち行く志を定めるまでの道筋を紹介します。

①　麒麟麦酒ラベルデザイン伝説

現在に繋がる麒麟麦酒ラベル（明治 22 年 6 月採用）は，紫水が学生時代（入学前後）にデザイン公募に応じて採用されたものと,紫水周辺の人々によって言い伝えられています。

②　課題画・教材など

紫水が受けた美術学校での教育を課題画や漆芸教材，教官作品などで紹介します。課題画では，紫水のほか，ともに学んだ横山大観や菱田春草などの初々しい作品も展示します。漆芸教材では，蒔絵が作られていく工程の手本などを展示します。教官作品では，日本の工芸史上技術的な頂点を極めたと言われる明治時代工芸の精華を見ることができます。

第２章　若き日の奮闘～卒業から渡米まで～

「彩漆杜若の図」（六角紫水，明治 34 年，大柿地区歴史資料館）

「岩に鶺鴒蒔絵丸額」（六角紫水，明治 37 年，東京藝術大学大学美術館，ニューヨークでの制作）

①　デザイン力の発揮

卒業後，紫水は美術学校に雇用され，やがて助教授として後進の育成に当たります。明治 26 年の卒業をはさんで，明治天皇御使用の菊螺鈿蒔絵棚に紫水考案の図案が採用され，意匠監督を務めたことは，漆芸家としての門出を飾る栄誉となりました。

②　日本美術院・色漆の開発・渡米

しかし，その道は波乱に富むもので，明治 31 年に岡倉天心が美術学校校長を罷免されたのに伴い，紫水は橋本雅邦や横山大観ら天心を崇拝する教官 16 名とともに連袂辞職し，日本美術院の創設に参画します。

この間，紫水は，古社寺保存法による国宝指定調査や色漆の研究に熱中し，多忙な日々を送ります。伝統的に五色のみ発色が可能だった漆の色数を豊富にした試みは，紫水の特筆すべき活動のひとつです。（国宝指定調査は第４章）

明治 37 年，紫水は，退潮にあった日本美術院の建て直しを期して渡米する岡倉天心・横山大観・菱田春草とともに渡米し，以後明治 41 年に帰国するまで，ボストン美術館で漆芸品の調査・整理・修復に従事するなどしました。

第３章　帰国後，漆芸界での地歩を築く

「螺鈿入梨子地蒔絵会席家具のうち飯椀」（六角紫水，大正 8 年，個人蔵）

「蓬莱雲鶴蒔絵書棚」（六角紫水ほか，大正 6 年，宮内庁三之丸尚蔵館）

アメリカでの西洋化学塗料との比較から，漆という天与の材の素晴しさを再認識した紫水は，帰国後，漆の鬼神と化して猛然と漆の仕事に打ち込み，頭角を表し，その地位を築いていきます。

①　工房「六角研究場」の活動

大正年間を中心に，多数の工人を抱え，漆塗りの自動車から蒔絵製品まで多くの漆製品を世に送り出していきました。

②　漆塗り列車や御料車の製作

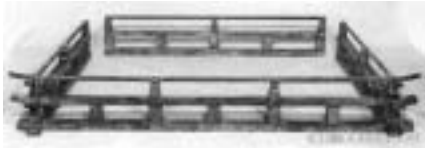
紫水は明治 44 年に鉄道院の嘱託になり，列車塗装や御料車の製作監督に携わります。列車への漆塗装を進言したのは紫水であると言われています。御料車では，第 7 号・第 8 号・第 11 号の製作監督を務めており，関連する部材や調度などを展示します。

③　皇室の委嘱制作，国会議事堂の玉座装飾など

紫水が制作または監督に当たった，昭和天皇から大正天皇に立太子の御礼として贈られた書棚や昭和天皇御愛用の置時計，国会議事堂玉座装飾の試作品などを展示します。

第４章　“ 国宝 ” を創った男～文化財の保存と研究～

「中尊寺金色堂実写図」（木村武山ほか，明治 30 年，東京国立博物館）



「中尊寺金色堂旧中央壇組勾欄（国宝）」（平安時代，12 世紀，中尊寺金色院）

①　古社寺保存法による国宝指定調査・修復

紫水は明治 30 年に古社寺保存法が公布される前年の明治 29 年から古社寺保存会の委嘱を受け，明治 36 年に至るまで国宝指定調査のために全国を奔走します。調査に際して紫水は日記を残しており，それらは他では知りえない当時の調査現場の実際が生き生きと記された，誠に興味深い貴重な記録で，その一部を図録・展覧会で紹介します。

また，古社寺保存法及び紫水の最初の仕事である中尊寺金色堂の調査・修復に関する資料として，ともに調査に当たった木村武山による明治 30 年当時の金色堂の実写図や，昭和 37～43 年の解体復元修理で取り外され，別途保管されている壮健当初（天治元・1124 年造営）の金色堂旧中央壇組高欄（国宝，附指定）を展示します。この高欄の南面中央斗束には，紫水が復元した紫檀張螺鈿が残されています。

「松喰鶴小唐櫃（国宝）」（平安時代，12 世紀，厳島神社）

②　国宝復元模写活動

紫水は大正 11～13 年頃に国宝の復元模造に専念します。その姿勢はただ外面を模写するのではなく，材料や道具，技法などを歴史的・科学的に考察して行うもので，漆芸を通した歴史の解明を志すものでした。紫水による国宝復元模写作品 5 件を展示するとともに，その復元模写の対象となった国宝・松喰鶴小唐櫃二合（厳島神社蔵）を並列展示します。

「金銅耳有紋漆杯」（漢時代，楽浪遺跡出土，東京大学文学部）

③　楽浪漆器との出会い

紫水は大正 12 年に楽浪漆器（前漢武帝が現在の平壌付近に置いた楽浪郡の遺跡から出土した漆器）を実見して以来，その繊細で自在な描線と刻線に魅せられ，楽浪漆器の研究と技法の復元に没頭します。紫水が調査と修理に携わった楽浪漆器（東京大学所蔵，楽浪郡王盱墓出土）を始め，楽浪漆器に倣った研究試作の数々をご紹介します。

第５章　花開く六角紫水の芸術

「刀筆天部奏楽方盆」（六角紫水，昭和 2 年，第 8 回帝展，広島県立美術館）

①　帝展・文展・日展出品作

このような古典研究の成果の上に，六角紫水独特の作品世界が展開します。特に技法的に大きな影響を与えたのが楽浪漆器ですが，若き日に従事した古社寺保存調査や大正期の国宝復原模写などを通じて脳裏に焼きついたであろう日本古来のデザインやモチーフが頻繁に用いられています。

代表作と位置づけられる帝展・文展・日展への出品作にはそれらの特徴が完成された姿で現れています。中でも，楽浪漆器研究の成果を初めて世に問うた昭和 2 年第 8 回帝展出品作「刀筆天部奏楽方盆」は作風の激変やユニークさ故に代作

嫌疑がかけられ，訴訟にまで発展した作品です。

② 生活の花　様々な試み～伝統技法から新素材まで～

「金胎蒔絵唐華文鉢」（六角紫水，昭和 10 年頃，東京国立近代美術館）

紫水は古典研究ばかりでなく，漆の使用を広げるために，様々な新しい試みにもチャレンジしています。そのひとつがアルマイトを漆器の素材として利用することです。紫水は滞米時代に，気候風土の変化で木胎素地が変形し，漆器破損の原因となっていることに接し，気候風土の影響を受けない素地の必要性に思い至り，やがて漆との相性抜群のアルマイトに出会い，素地や装飾材料として使用するようになります。この技法は理研電化工業や会津漆器などに取り入れられ，戦前・戦後の輸出漆器などとして活用されました。

第６章　紫水から次世代へ～現代漆器の展開～

「草花鳥獣文小手箱」（松田権六，大正 8 年，東京芸術大学大学美術館）

紫水の薫陶を受けた教え子たちの作品を紹介します。伝統蒔絵を継承・発展させた松田権六，クラフト運動を進めた六角大壌や磯矢阿伎良，色漆による絵画的表現を継承・発展させた山崎覚太郎，金胎漆器を継承・発展させた寺井直次など，現代漆器へと様々な展開を遂げた紫水の志を辿ります。

「蝸牛宝石箪笥」（山崎覚太郎，昭和 9 年，京都市美術館）

アメリカにて
ピアノに蒔絵をしたときの写真

[六角紫水肖像写真]